

1. 教授要目

I 文系教養科目

東工大立志プロジェクト (Tokyo Tech Visionary Project)

°中野 民夫 教授 三ツ堀 広一郎 准教授 谷岡 健彦 教授 弓山 達也 教授 他

1-1-0 1Q

新入生全員の大学生活のスタートとなる科目である。

東工大の教育は、世界をリードし、変革していく人材を生みだしていくことを目標としている。そのためには自分の専門分野の知識や能力だけではなく、広く世界を知ること、そして深く自分自身を知ることが必要である。

現代世界に存在するいかなる問題にチャレンジし、どのような問題意識を持って、自分の中の隠された可能性を開花させ、具体的に行動していくのか。科目名にもあるようにひとりひとりがいかなる「志」を立てて進んでいくのかが問われている。

本講義は講堂での大人数講義と少人数クラスでの演習を有機的に組み合わせながら、世界が抱える問題を知り、仲間との協働の中で自分も活かし仲間も活かすような場作りを学び、大学での今後の学びにつながる展望を得ていく。大人数講義では、各界で活躍するゲストスピーカーの話を聴き、いま社会で何が起きているのか、知的世界で何が問われているのかを知る。少人数クラスの演習では、グループワークを通じて自発的に考え、問題を発見し、他者と合意形成するためのスキルを修得する。演習の最終回では、各グループで立てたテーマをめぐってプレゼンテーションをおこなう。また書評執筆のワークショップを通じて、本の読み方を身につけ、本に対する批評眼を涵養する。

本講義は、リベラルアーツ教育の必修コア科目のひとつであり、そのスタート地点に位置づけられる。本講義の後に様々な分野の講義を履修し、3年次での「教養卒論」でひとりひとりの成果を総括するに至る東工大のリベラルアーツ教育は、各自の目標に向かって志を立てるプロジェクトとしてとらえることができるだろう。そのプロジェクトの出発点として、そこに必須の知的潜在力を掘り起こし、社会的視野を広げること、そして学びに必要なコミュニケーションとプレゼンテーションのスキルを高めることが本講義のねらいである。

教養卒論 (Liberal Arts Final Report)

(平成 28 年度休講)

0-2-0 3Q, 4Q

学部での教養教育の出口となる必修科目である。自身の「学びのストーリー」を描いてもらう。これまでに学んできた教養が、今後学んでいく専門科目や自身の将来ビジョンにとってどう生きてくるのか、社会にどう活かせるのか、A4用紙3枚程度にまとめる。小グループ単位で相互にレビューしながら、大学院学生の指導を受けながら執筆を進める。書いた文章を仲間にも批判・添削してもらいながら仕上げることを通して、自分の考えを文章にまとめる楽しさ・苦しさを体験してもらいたい。

哲学A (Philosophy A)

桑子 敏雄 教授 1-0-0 2Q

哲学入門。哲学的対話の実践をトレーニングする。

芸術A (Art A)

伊藤 亜紗 准教授 1-0-0 3Q

本講義は、古代から 19 世紀までの西洋美術の大まかな流れを知るための導入的な科目です。パルテノン神殿、ゴシック建築、ミケランジェロ、レンブラント、マネなどの主要な作品を鑑賞しながら、西洋社会がどのような価値観を重視し、また芸術にどのような役割を期待してきたのかも考えます。教員による一方的な授業ではなく、グループワーク等学生のみなさんの積極的な参加によって授業を進めていきます。

本講義のねらいは、ふたつあります。ひとつは、西洋文化を理解する上で不可欠な基礎的教養を身につけること。もうひとつは、自分の感じたことや考えたことを説得的に伝えるコミュニケーション力も身につけることです。

文化人類学 A (Cultural Anthropology A)

上田 紀行 教授 1-0-0 4Q

文化人類学とは他文化のあり方を知りながら自文化を知る、他者を理解しながら自分自身の理解を深める学問である。本講義は文化人類学への入門であり、文化が異なるといかに私たちの考え方、世界観、行動様式が違ったものになるかを知り、自分自身のこれまでの生きてきた世界の見直しと、多様な世界への感性を養う。受講者どうしによるワーク、ディスカッションなども取り入れて、実際に他者を理解し、自分自身を深める機会を作りたい。

文学 A (Literature A)

磯崎 憲一郎 教授 1-0-0 4Q

本講義では、小説という表現形式の独自性・優位性を学ぶ。

小説は、「文字で書かれた伝達手段」でありながら新聞記事や評論とは違う、また、単なる物語（ストーリーテリング）でも、情報や教訓でもない。芸術としての小説の独自性を、音楽や映像といった他の芸術とも比較しながら、構造的に分析・検証する。

本講義のねらいは、じっさいに「小説（作品）を読む」前の準備として、学生が持っている「文学作品は難解なもの、高尚なもの」といった権威主義的な小説観を取り払い、「そもそも、小説とは何なのか？」を、自らの頭で考えさせる所にある。

歴史学 A (History A)

三津間 康幸 非常勤講師 1-0-0 3Q

この講義は歴史学の基礎的問題を提示する。史料の信頼性を評価する手法が紹介され、伝統的な東洋史、西洋史といった枠組みが批判される。ダン碑文、バビロン捕囚、ガウガメラの戦いといった史料、事件をめぐる問題を考えることを通して、前記の紹介、批判が行われる。

この講義で得られた知識を応用することにより、学生はさまざまな文書をより適切に評価することができるようになる。

宗教学 A (Religion A)

弓山 達也 教授 1-0-0 4Q

本講義では宗教学の基本を学ぶ。特に現代社会における宗教の役割や機能に注目しつつ、宗教観、カルト問題、宗教と自分探しを扱う。

コミュニケーション論 A (Communication A)

中野 民夫 教授 1-0-0 2Q

「立志プロジェクト」の少人数グループワークの精神を受け継ぎ、人と人との生身のコミュニケーション能力の向上を目指す。人は社会的な生き物であり、人と人が一緒に考えたり、学んだり、創ったりすることは、私たちの根源的な欲びに通じる。今後あらゆるところで人とやりとりしながら生きていく上で、対人コミュニケーション力は不可欠である。本

講義では、参加体験型のワークショップを通して、コミュニケーション力の向上を図る。

ねらいは、自己紹介、インタビュー、対話、プレゼンテーションなどの体験を通して、楽しみながらコミュニケーション上手になってもらうこと。

教養特論：多文化共生論 (Special Lecture :Social and Cultural Diversity)

(平成 28 年度休講)

1-0-0 3Q

多文化化が進む日本の状況を知り、多様性のある社会とは何か、多様な人々が共生するにはどのようなことが求められるかを考える。文化・民族・宗教が混在する海外の事例も取り上げて考察する。講義では、異文化間コミュニケーションの概念と方法論を用いたグループワークやディスカッションを行い、異なる背景や文化をもつ人々と対話するコミュニケーション能力を身につけることを目指す。

教養特論：言語と文化 (Special Lecture : Language and Culture)

赤間 啓之 准教授 平川 八尋 准教授 山元 啓史 准教授 1-0-0 3Q

本講義は、言語学 A、言語学 B、言語学 C の導入科目として、学生が言語と言語学に関心をもつ機会を提供する。言語学の分野から三つ選び、それぞれの分野で興味深いトピックスを問題として取り上げ、学生の討論と実習によって講義をすすめる。統語論の回では、所有関係やアスペクトなどのカテゴリーについて議論する。音韻論の回では言語の音声と音韻をについて扱い、言語音はどのように記述されてきたのか、実際に発音してみることで理解する。意味論の回では、言語の恣意性や仮想動作など言語のデリケートな問題を取り上げる。

この講義の狙いは言語学に関する本質的な洞察力を身に付け、関連する言語学関係の授業科目履修の準備をし、学生がより体系的・網羅的な言語科学への第一歩を踏み出すことにある。

外国語への招待 1 (Introduction to Foreign Languages 1)

安徳 万貴子 准教授 市川 伸二 教授 山崎 太郎 教授 劉 岸偉 教授

戦 暁梅 准教授 三ツ堀 広一郎 准教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師

1-0-0 2Q

最初の二回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、三週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、歴史などの紹介も含め、各国語についてリレー形式で講義する（第 2Q ではフランス語およびロシア語について）。

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

外国語への招待 2 (Introduction to Foreign Languages 2)

市川 伸二 教授 安徳 万貴子 准教授 劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授

三ツ堀 広一郎 准教授 山崎 太郎 教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師

1-0-0 3Q

最初の二回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、三週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、

歴史などの紹介も含め、各国語についてリレー形式で講義する（第3Qではドイツ語および中国語について）。

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

法学（憲法）A（Law（Constitutional Law）A）

大西 健司 非常勤講師 1-0-0 2Q

【概要】

日本国憲法に関する基礎的な講義を行います。対象分野は憲法学の全般（憲法総論、人権及び統治機構）に及びます。憲法の基本原理である近代立憲主義の観点から憲法の意義や役割を確認するとともに、個別の規定の解釈論を検討します。

【ねらい】

講義や学修を通じて自分なりの憲法観を獲得し、社会に生起するさまざまな憲法上の問題を自ら考える上で拠り所となる視座をもつこと。身の周りに存在する人権問題への鋭敏な感覚とともに、政治や行政を監視し、主体的に政治プロセスに携わる市民としての能力や資質を涵養すること。

法学（民事法）A（Law（Civil Law）A）

金子 宏直 准教授 1-0-0 3Q

法律の最も重要なひとつである民法の全体について概略を学習する。各種資格試験に必要な「民法」に対応する科目である。平成27年までの学部文系科目「民法概論」の後継科目である。

民法は、多くの法律の基本になる法律であるため、民法を学習することで法律の基本的な考え方を学ぶことが講義の目的である。知的財産法を将来学習しようとする学生も民法を学習することが必要である。法律を学習するのに必要となる六法の使い方も身につけることで、将来、自分の仕事に関連する法律の理解にも役立てることができる。

政治学A（Political Science A）

中島 岳志 教授 1-0-0 4Q

本講義は現代日本におけるナショナリズム問題について考察する。まずナショナリズム論の最前線の議論を講義し、その後、具体的な現象について映像・音楽・マンガなどを使用しながら解説する。ポイントは「不安型ナショナリズム」。社会が流動化し、安定的な社会基盤が失われる中、なぜナショナリズムが歪な形で勃興するのかを考える。さらに「不安型ナショナリズム」現象と連動するセカイ系アニメの分析、秋葉原事件のような無差別殺傷事件の分析を通じて、現代の不安を性質を内在的に理解し、その政治的解決法を考察する。

本講義のねらいは3つある。一つはナショナリズムについての基礎知識を身につけること。二つ目はナショナリズム勃興の背景となる現代社会の特徴を把握すること。三つ目はその解決方法を政治学的に考えること。その過程で、受講生自身が「いかに生きるのか」という問いを深めることを期待する。

国際関係論A（International Relations A）

倉金 佳 非常勤講師 1-0-0 2Q

本講義では、近現代史（特に欧州）の流れを追いながら、国際関係学の基礎を学ぶ。主な題材は、ウェストファリア体制以降、今日に至るまでの欧州を中心とした国際関係史。

本講義のねらいは、次の3つ。第一に、国家・国民・民族といった基本的な分析概念を知った上で、ナショナリズムが起源となっている諸問題についての理解を深めること。第二に、今日の世界で起きている事象について、受講生各人が論理立てて分析し、自分のことばで説明できるよう（国際）政治分析の方法を習得すること。第三に、本講義で学んだことを元に、更なる関心をもって国際政治の動向を観察する習慣を身につけること。

なお、講師はハンガリー在住、大学で近現代史の講義等を担当している。昨今話題となっている難民・移民の動向をはじめ欧州情勢を常時観察しており、実際にプレス関係者の取材に通訳・コーディネーターとして同行することも少なくない。

心理学A (Psychology A)

永岑 光恵 准教授 1-0-0 3Q

本講義では、心理学入門として心理学の歴史から最近の研究成果にわたって概説する。特に、多岐にわたる分野の中から知覚、記憶、感情について取り上げる。併せて、心のメカニズムについての仮説を立て、実証していく心理学的な研究方法（実験や調査）についても講義する。

講義を通して、「人間とは何か」「人間の心とは何か」を考察し、人間理解を深めることを目的とする。

教育学A (Pedagogy A)

吉田 直子 非常勤講師 1-0-0 4Q

一般に、私たちが「小学校」や「中学校」と呼んでいる「学校」とは、法的には学校教育法第一条で定められた「一条校」に属する学校である。しかし実際には、さまざまな理由から一条校に通うことができない人々や、一条校以外の学びの場を必要としている人々のための「学校」でも教育が行われてきた。特に近年、人権意識の高まりや人々の価値観の多様化、日本社会の多文化化などを背景に、一条校の枠を超えた「学校」へのニーズがさらに高まってきている。そこで本講義では、主として一条校の認定を受けていない「学校」をとりあげ、その社会的意義や課題、政府や行政の対応、そこに通う人々の思いなどに触れることを試みる。

本講義のねらいは、次の3点である。まずひとつめは、さまざまな「学校」の存在を知ることで、我々が持っている「学校」や「教育」に対するイメージを相対化することである。ふたつめは、そのような「学校」の実践に触れることで、日本社会がたどってきた歴史や現状、今日的課題を教育の観点から捉え直すことである。最後は、ますます多様化する教育ニーズへの理解や他の受講者との意見交換を通じて、これからの「学校」や「教育」のあり方を「教育を受ける権利」の観点から再考することである。

社会学A (Sociology A)

西田 亮介 准教授 1-0-0 2Q

社会学の基本的な考え方を理解し、その思考法をとおして、現代社会についての理解を深める。また、その背景としての社会学史について、理解する。

現代社会論A (Contemporary Society A)

岡田 庄生 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講座は、株式会社博報堂の現役社員のリレー講座形式で行われる。地域創生や男女共同参画、食の問題など、現代社会を取り巻く様々な課題をアイデアやコミュニケーションで解決している新しく具体的な最新事例を扱う。

授業形式は、講師からの一方的な解説ではなく、グループディスカッションや質疑応答を通じて、様々な視点や知識を講師が

提供する。なぜなら、主体性や協調性を高めることが、現代社会の課題を解決する上で益々重要になってくるからである。

本講座のねらいは、現代社会の課題に取り組む上で重要な3つの力、すなわち ①問いを立てる力 ②構想を描く力 ③行動を創る力 を身につける事である。この3つの力を知ることが、今後どのような課題に対応するときでも、自分なりに課題を探り、ビジョンを描き、実践へと踏み出すための思考の基礎となる事が期待される。

(株式会社博報堂は国内2位の大手広告会社で、広告コミュニケーション領域を中心に企業や社会の課題解決を行っている。2005年に流行語大賞にも選ばれた環境省「クールビズ」キャンペーンなど、様々な現代社会の課題解決の実績を持つ)

経済学A (Economics A)

山名 一史 非常勤講師 1-0-0 4Q

講義の概要

この講義は予備知識の有無にかかわらず、経済学に関心のあるすべての学生を対象としている。現在、他分野を専攻している(する予定である)学生で、他の学問分野についても勉強してみたい学生に適した講義内容となっている。講義では、具体的な事例を通じて経済学者の思考法を紹介する。現実的な具体例を用いることで、抽象的な理論やそこで用いられている数学の知識を学ぶことなく、実践的な経済分析のノウハウを学ぶことができる(もちろん、分析に使われている数学や統計的な手法を知ることにより深い理解を得ることができる)。講義ではマイクロ経済学、マクロ経済学、そして計量経済学に関するトピックを扱う。マイクロ経済学は家計や企業といった個々の主体を扱う分野であり、マクロ経済学はGDPや失業率といった集計データを扱う学問である。また、計量経済学はマイクロ経済学やマクロ経済学で提示された理論仮説の妥当性を現実のデータを用いてどのように検証するか、を分析する分野であり、これは自然科学における実験手法に相当する。

経済学は日常生活における様々なものごとを理解するうえで非常に便利な道具であり、経済学を専攻する学生はもちろんのこと、そうでない学生であっても基本的な経済学の知識を知っておくことは重要である。『経済学者のように考えること』で、人生においてより良い意思決定や予測を行い、さらに様々な疑問に対して的確な答を導けるようになることが本講義のねらいである。

現代ジャーナリズムA (Journalism A)

高村 是州 非常勤講師 1-0-0 4Q

現代社会において、衣服は単に身体を守る物ではなく様々な役割を担っている。本講義ではファッションや若者文化がどのように作られ流通していったのかを学び、「ファッションとは何か」について一緒に考える。

具体的には、トラッド、フォークロア、ロック、カジュアルといった四大ファッションスタイルの歴史をひもとき、それらを軸として、現在どのようにファッションが生み出されているのかを考えていく。解体と再構築、ジェンダーレスと言った現代ファッションのキーワードをひもとき、自らのファッションに対する考え方の軸を養い、学生本人の着こなしも向上できるような講義を目指していく。また、デザイン発想にも取り組み、消費者としてではなく、提案する側からファッションを捉えることで、社会が求めるファッションデザインや流通の仕組みについても考えていく。

統計学A (Statistics A)

未定 1-0-0 2Q

ビッグ・データ時代には、膨大な情報の中から有用な情報を探し出し、不確実性の中で予測と意思決定を行う能力が求められる。この点で統計学は、多様な学問分野のみならず、実社会においても極めて重要なものとなっている。本講義の

ねらいは、統計的思考や統計分析に関する基礎的知識（記述統計，仮説検定，相関，回帰，データ集約等）を習得すると共に、統計学の可能性と課題を考える力を涵養することにある。

科学史 A (History of Science A)

梶 雅範 教授 1-0-0 3Q

本講義は、科学の誕生から近代科学の成立までの科学の通史をとりあげる。ギリシア，ローマ，イスラムにも触れ，中世ヨーロッパから 17 世紀ヨーロッパまでを扱う。本講義では，古代から近代までの科学の発展をその時代の社会との関連で理解することを目指す。同時に，科学的方法，自然観の変化についても考える。

技術史 A (story of Technology A)

中島 秀人 教授 1-0-0 4Q

この授業では，科学技術と社会の間に起こる諸問題を議論する。そしてこのような問題をどのようにすれば防止できるかを考える。

科学技術社会論・科学技術政策 A (Science and Technology for Society A)

調 麻佐志 准教授 1-0-0 2Q

科学や科学的事実とはどのようなものと考えられるのか。その「事実」の形成に研究者や論文がどう作用しているのか。翻って、「事実の形成」という観点から，研究者にはどのような行動が求められるか。そのような問題に関する入門的な内容について講義する。

本講義のねらいは，

- (1) メタな視点から科学を見る
- (2) 研究の内容だけでなく研究者の役割や責任について基本的自覚を持たせる
- (3) 科学技術社会論への関心を高める

の3つである。

科学技術倫理 A (Ethics in Engineering A)

札幌 順 教授 1-0-0 3Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し，現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し，倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して，「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく，科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また，倫理的科学者・技術者が，社会の福利に貢献するだけでなく，自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。

科学哲学 A (Philosophy of Science A)

田子山 和歌子 非常勤講師 1-0-0 4Q

本講義は，デカルト，ライプニッツなど大陸合理主義にみられる思弁的原理と，ボイル，ニュートン，ヒューム，バークリーなどイギリス系の経験的原理という二つの代表的な方法論を扱い，同時にこれら二つの方法論に共通する文化的・歴史的基盤を概観する。そのことによって，17，18世紀ヨーロッパの自然科学の方法論を，科学思想史の文脈を踏まえて分析する。

社会モデリング A (Social Modeling A)

岩井 淳 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講義では、社会的意思決定過程、とりわけ情報時代における社会的意思決定過程をモデルするための基礎的技法を提示する。主要な論点として、社会的選択理論とシャノンの情報理論の基礎的枠組みを講義する。

本講義のねらいは、社会的意思決定に関する概念的理解を得る機会と、この領域における独立した研究的関心を育むような機会を、受講生に提供することである。

意思決定論 A (Decision Making A)

猪原 健弘 教授 1-0-0 2Q

意思決定論における重要な意思決定問題を取り上げ、解決策、解決策の利点や欠点、そこから得られる示唆を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて検討する。

意思決定論が扱う意思決定問題の代表例と解決策、および、意思決定論の基本概念と基礎的な知見を理解・修得させると同時に、意思決定論への興味を喚起することが本講義のねらいである。

言語学 A (Linguistics A)

°平川 八尋 准教授 山元 啓史 准教授 1-0-0 4Q

言語学の入口として、私たちが日々触れている言語の具体的現象を取り上げて、そこにはどんな言語の不思議が詰まっているのか、身近の経験を言語の科学として楽しむ授業を行う。予備知識は不要。必要なのは言語に向き合う素直な態度と食欲な好奇心だ

教養特論：ライティングスキル (Special Lecture : Writing Skills)

°山元 啓史 准教授 平川 八尋 准教授 0-1-0 1Q, 2Q, 3Q, 4Q (H28 年度 1Q のみ休講)

論文・レポートの形式、決まり事を学ぶだけでなく、どうすれば、論文・レポートができるのか、その執筆計画、日頃の考えの蓄積、積み上げ方、整理の仕方、まとめ方について、グループで話し合い、実際に自分で簡単な実験を行い、その内容をまとめる体験を行う。

哲学 B (Philosophy B)

桑子 敏雄 教授 2-0-0 1Q

西洋哲学の基礎を学ぶ

芸術 B (Arts B, Esthetics B)

伊藤 亜紗 准教授 2-0-0 2Q

本講義では、キュビズムからポップ・アートまで、20 世紀美術の代表的な作品を鑑賞します。アートの鑑賞に正解はありません。アートを楽しむ第一歩は、作品を見て自分がどう感じたかを率直に言葉にすること、そして、それを他者と共有し深めていくことです。したがって本講義は、学生のみなさんが能動的に鑑賞するグループワークや簡単な作品制作を行うワークショップを積極的に行います。そうした活動を通じて他の学生の見方を知り、作品を多角的に捉えることができるようになるでしょう。そのうえで講師が、当時の時代背景などを含めた必要な知識を提供します。

本講義のねらいは、ふたつあります。ひとつは、アートを鑑賞する力を身につけることです。ふたつめは、20 世紀美術の代表的な作品についての知識を身につけることです。この鑑賞力と知識があれば、今後どんな展覧会に行っても楽しめるようにな

るはずで。また、鑑賞の訓練をつむことで、自分の考えを説得的に伝えるコミュニケーション力も身につくはずで。

文化人類学B (Cultural Anthropology B)

里見 龍樹 非常勤講師 2-0-0 3Q

日本から約 5,000 キロ離れた南太平洋の海上に、マライタ島という島がある。2008 年 3 月、この島をはじめて訪れた私は、そこに住む「海の民」(アシ) と呼ばれる人々に出会った。この人々は、サンゴ礁が広がる浅い海に、無数の岩を積み上げて人工の島を造り、その上に暮らしてきた。その後約 1 年半に渡って「海の民」と暮らす中で、私は数々の驚くべき事実と出会うことになる。島から島へと移り住んできた祖先たちの歴史、キリスト教の宣教師との遭遇、祖先の化身であるサメとのやり取り、日本では決して見られないような農耕や漁撈の技術……

この例が示すように、文化人類学は、フィールドワークによる個別事例への密着を通して、世界各地で営まれる人間の文化・社会生活の多様性や複雑性を明らかにしてきた学問である。本講義では、古典から現在に至る文化人類学の流れを、講師自身の調査地をも例にとりつつ、「社会」、「コミュニケーション」、「歴史」、「自然」といったキーワードに即して概説する。後半では、近年盛り上がりを見せている科学技術に関する人類学的研究を取り上げ、科学技術と文化人類学がどのように結び付きうるのかを探る。講義は全体として出席・参加重視で行い、課題文献や映像を題材にしたグループ・ディスカッションも行う。

本講義のねらいは、第一に、人間の文化・社会生活の多様性や複雑性に対する人類学的な視点を身に付けてもらうこと、第二に、自然環境や科学技術をめぐる現代的な諸問題に対して、人類学的に考える力を身に付けてもらうことにある。

文学B (Literature B)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 3Q

本講義では、古典から近代小説、日本の現代小説まで、個々の作品を「読む」事を通じて、「小説とは何か？」を学ぶ。小説の起源まで遡り、古典から近代小説、現代小説まで見渡した上で、個々の作品の特徴を捉え、「小説という表現形式でなければ出来ない事を始めたのは、いつの時代の、どの作家からだったのか？」を具体的に考察し、「小説とは何か？」、実作者でもある担当教員の考え方を示して行く。文学史的位置付けや、マッピングといった客観的分析ではなく、小説本体に寄り添い、「この作品を書いている最中に、作者は何を企み、どんな頂きを目指していたのか？」を考えながら、より能動的に、個々の小説を読み込んで行く。

歴史学B (History B)

安原 眞琴 非常勤講師 2-0-0 1Q

この授業では 16 世紀から 19 世紀の日本文化の歴史を鳥瞰します。歌舞伎や浮世絵といった日本文化の歴史的背景が学べます。達成目標は、日本文化を理解することと、強い学習意欲を持つことの 2 つです。

宗教学B (Religion B)

弓山 達也 教授 2-0-0 2Q

本講義では 1980 年代後半のバブル期から東日本大震災 (2011 年) までに見られる日本のスピリチュアル文化を理解することを目的とする。特にスピリチュアリティと社会との関係に重きを置き、スピリチュアルブームとその背景、若者の死生観、大衆文化に見られるスピリチュアリティを扱う。

コミュニケーション論B (Communication B)

中野 民夫 教授 2-0-0 3Q

本講義は、簡単な正解のない様々な課題に対して、多様な人々が「協働」で取り組むことが求められる時代に、人と人が対面して話し合うコミュニケーション力を高める。自ら良き話し手、聴き手になるだけでなく、人々が集い話し合う場を適切に創り、円滑に進行していく「ファシリテーション」の基本技を身につける。

ねらいは、今後のチームでの研究活動など、様々な人が協働する場に活かせる生身のコミュニケーション力を、楽しいワークショップ体験を通じて向上させること。

法学（憲法）B（Law（Constitutional Law）B）

村松 芳明 非常勤講師 2-0-0 2Q

憲法（学）に関する基礎的で最重要の知識事項の解説を行う講義である。具体的には、立憲主義や憲法の歴史、憲法改正、平和主義等の、専門的には「憲法総論（統治機構含む）」と呼ばれる領域についてとり上げた後、人権の概念や人権保障の基本的なあり方等の「人権総論」領域についてとり上げ、最後に「人権各論」領域に移ることになる。

本講義の狙いは、憲法の最も基本的で重要な事項について受講者が理解に達することである。また、現実の諸問題と学問との架橋も副次的な狙いとしている。

なお、本講義は教職等で必要になる「憲法」科目に対応するものである

法学（民事法）B（Law（Civil Law）B）

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

法律の最も重要なひとつである民法の全体について概略を学習する。各種資格試験に必要となる「民法」に対応する科目である。平成27年までの学部文系科目「民法概論」の後継科目である。

民法は、多くの法律の基本になる法律であるため、民法を学習することで法律の基本的な考え方を学ぶことが講義の目的である。知的財産法を将来学習しようと予定している学生も民法を学習することが必要である。法律を学習するのに必要となる六法の使い方も身につけることで、将来、自分の仕事に関連する法律の理解にも役立てることができる。

政治学B（Political Science B）

中島 岳志 教授 2-0-0 2Q

政治学の基礎について、現代思想の成果を取り入れ、論じる。理論的側面を講義した上で、具体的な現代社会の課題について論じる。政治学とは、異なった能力・価値観・意見・慣習をもった他者同士が、ひとつの場所でいっしょにやっていくための方法を考える学問である。重要なのは自分とは異なる他者の存在を前提とすること。他者とわかりあうことは、そう簡単なことではない。時にもどかしく、時にイライラする。しかし、何とか合意形成しなければ、社会の秩序を保つことはできない。では、どうすればいいのか。その試行錯誤の軌跡と思考を講義し、現代社会への展望を論じる。

本講義のねらいは2つある。一つは政治学の基礎を習得すること。二つは現代社会の課題に対して、政治学的解決の方法を身につけること。この能力を身につけることで、異なる他者との共存のあり方を模索することが可能となる。

国際関係論B（International Relations B）

パトリック・ハーラン 非常勤講師 2-0-0 3Q

国際化が急ペースで進む中、日本はある意味、もう島国ではないといえよう。国民も一つの国に所属して活動する“日本人”というよりも、世界を視野にいれ、グローバルで活躍する“国際人”にならないといけない時代だ。本講義は国際関係理論の基本を学んだ上、世界の現状を見て日本や日本人の可能性と役割を検証する。温暖化、移民や難民、テロ、情報社会、集団的自衛権、領土、捕鯨、TPPなどなど、話題沸騰中の課題を取り上げながら理論を応用する。

レクチャーの他、ディスカッションやプレゼンを通して学生同士が刺激しあう場を提供する。世界と接するときの心構えやコミュニケーション術も学習し、セオリーや基本知識をもって世界を相手に議論できる、21世紀型の人材育成を目指す。

心理学B (Psychology B)

永岑 光恵 准教授 2-0-0 4Q

本講義では、心理学の多岐にわたる分野の中から知覚、記憶、学習、感情、性格、社会行動について取り上げる。併せて、心のメカニズムについての仮説を立て、実証していく心理学的な研究方法（実験や調査）についても講義する。講義を通して、「人間とは何か」「人間の心とは何か」を考察し、人間理解を深めることを目的とする。

教育学B (Pedagogy B)

吉田 直子 非常勤講師 2-0-0 1Q

平和教育のマンネリ化が指摘されるようになって久しい。一方、祖父母の世代ですら戦後生まれという現代の子どもたちにとって、先の大戦の記憶に思いを馳せることはますます難しくなっている。戦争体験者がひとりもいなくなってしまう時代を目前に控え、私たちは戦争の記憶と平和への願いをどのように感受し、継承していくことができるのだろうか。そこで本講義では、沖縄戦に翻弄されたひめゆり学徒隊にスポットをあて、その筆舌に尽くしがたい痛みの記憶を、元学徒や彼女らとともに活動してきた戦後世代はどのように伝えてきたのか、またメディアは「ひめゆり」をどのように表象してきたのか、といった点を中心に検討を行う。その後、受講者自身が受けてみたいと思えるような、戦争の記憶を伝える平和学習のためのショートプログラムの作成・発表を行う。

本講義のねらいは、端的には「平和」という概念を捉え直すことであるが、具体的には次の3点を目指したい。まずひとつめは、ひめゆり学徒隊の事例を通して、沖縄戦の実相とその継承活動への理解を深めることである。ふたつめは他者の記憶の表象可能性とそこに孕む政治性に対する意識を高めることである。最後は、プログラム作成を通じて自らの問題意識をかたちにする作業を経験することである。

社会学B (Sociology B)

西田 亮介 准教授 2-0-0 2Q

本科目は、社会学を中心としたメディア論の基本的な考え方とメディア史、事例を学習する。それらを踏まえて、現代におけるメディアと社会に関連する諸問題を検討できるようになることを目的とする。

現代社会論B (Contemporary Society B)

池上 彰 教授 2-0-0 1Q

憲法や安保、日米関係、メディアリテラシー、イスラムやアメリカ大統領選挙、北朝鮮など現代に生きる学生たちに、社会に出てから必要とされる現代社会の認識力を身につけてもらうことを一義的な目標とする。

経済学B (Economics B)

佐藤 仁志 非常勤講師 2-0-0 4Q

本講義は、経済学の根幹をなすミクロ経済学を紹介する。ミクロ経済学は、個人や企業など個々の経済主体の意思決定とその相互作用を扱う。例えば価格や所得の変化が個人の消費行動にどのような影響するか、市場において価格や需給はどのように決まるかなどである。さらに、個々の経済主体の意思決定やその相互作用を明らかにすることで、市場の機

能、産業の形成、政府の政策や経済の国際化の影響等を分析する。

本講義のねらいは、経済学的な考え方の基礎を身につけること、それを通じて、社会の様々な経済的な事象や政策に対する関心を高め分析的に考えられるようになることである。

現代ジャーナリズムB (Journalism B)

津田 大介 非常勤講師 2-0-0 1Q

ジャーナリズムと、ネットがジャーナリズムに与えた社会的影響や最新動向を論じながら現代のメディアのあり方や、ネットの情報発信全般について自ら考えられる力を身につけるとともに、ソーシャルメディア時代のメディアリテラシーについて実践的な理解を深める。

統計学B (Statistics B)

未定 2-0-0 2Q

統計的手法は自然科学・社会科学・人文学など、様々な領域で活用されている。本講義では、統計学の基礎を学ぶ。講義内容には、記述統計、確率と主な確率分布（二項分布、正規分布、t 分布等）、標本抽出、推定、仮説検定、相関と回帰、分散分析等の理論的基礎及び計算法・応用法が含まれる。

本講義のねらいは、統計的思考と基本的な統計手法を習得することにある。履修者は、データの記述法や仮説検定、統計的推論の方法を身に付けることで、統計分析を用いた研究に進むことができる。

科学史B (History of Science B)

梶 雅範 教授 2-0-0 3Q

本講義は、18 世紀から現代の科学の通史をとりあげる。主として欧米の科学史を扱うが、日本や他の文明圏にも触れる。18 世紀の科学の発展をその時代の社会との関連で理解することを目指す。同時に、科学的方法、科学的自然観の変化についても考える。

技術史B (History of Technology B)

中島 秀人 教授 2-0-0 4Q

技術の歴史を古代から産業革命前まで概観し、社会基盤としての技術や、それを支えてきた人々について知る。

教養特論：大学史 (Special Lecture: History of Universities)

梶 雅範 教授 亀井 宏行 教授 中川 茂樹 教授 遠藤 康一 特任講師

阿児 雄之 特任講師 広瀬 茂久 非常勤講師 道家 達将 非常勤講師 岡田 大士 非常勤講師

田口 陽子 非常勤講師 2-0-0 1Q

みずからの東京工業大学（東工大）を例に大学の歴史について考える。私たちの学ぶ東工大とは、どのような大学か。130 年を越える東工大の歴史をつくった人々とその成果にかんする講義を聴き、キャンパスの関係の地を探访しその産み出したモノに触れ、その歴史を学ぶ。さらに、自分たちの目で東工大の過去と現在をよく知り、その未来について考える。そのことを通じて、科学・技術の専門家をめざす東工大生が、日本の科学・技術の未来について、それぞれに考える。

科学技術社会論・科学技術政策B (Science and Technology for Society B)

調 麻佐志 准教授 2-0-0 1Q

科学者の社会的責任とは何だろうか。今後の科学技術のガバナンスはどうあるべきか。専門家と市民の科学コミュニケーションはどうあるべきか。さまざまな事例をもとに考えるのが本講義である。将来の自らの研究成果の社会への影響に関心のある理系の学生、そして自然科学の個別の学問領域を越えて、外交や国際関係、法律そして社会制度の関係する複合領域の問題（科学技術のガバナンス）に関心のある文系の学生、双方に開かれている。

本講義のねらいは、

- (1) 自らの研究成果が社会へ与える影響に関心を持つ人材を育成する
- (2) 外交や国際関係、法律、そして社会制度などが関係するような複合領域の問題に対するアウェアネスを高めることである。

科学技術倫理B (Ethics in Engineering B)

札幌 順 教授 2-0-0 2Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを 具体的な事例をとおして検討する。

科学哲学B (Philosophy of Science B)

東 克明 非常勤講師 2-0-0 3Q

意思決定論B (Decision Making B)

猪原 健弘 教授 2-0-0 1Q

競争的意思決定状況を数理的に扱うための理論である非協力ゲーム理論の基礎と、そこから派生したさまざまな理論を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。

非協力ゲーム理論の基礎的枠組みとしての「標準形ゲーム」、「展開形ゲーム」、「繰り返しゲーム」、そして、非協力ゲーム理論から派生した理論である「メタ ゲーム理論」、「コンフリクト解析」、「ハイパーゲーム理論」、「ソフトゲーム理論」についてのさまざまな概念の数理的な定義と分析方法を与えることで、各枠組みや理論の特徴を理解させることが本講義のねらいである。

社会モデリングB (Social Modeling B)

岩井 淳 非常勤講師 2-0-0 4Q

本講義では、社会的意思決定の支援のための基本的な概念やツールを提示する。主要な論点として、意思決定支援システム、社会調査、個人情報、厚生主義、帰結主義を含む。

本講義のねらいは、意思決定支援に関する概念的理解を得る機会と、この領域における独立した研究的関心を育むような機会を、受講生に提供することである。

言語学B (Linguistics B)

平川 八尋 准教授 山元 啓史 准教授 1-1-0 2Q

言語に向き合う経験を積んだら、次は、ことばを分析してみよう。どうしてことばの使い方にはルールがあるのか、ルール（文法）を（意識的には）知らなくても話ができるのはなぜか、ルールを知っていても外国語になると母語のように話せないのはなぜか、文法、語彙、意味、それぞれには、まだまだ知らないルールがたっぷり含まれている。それをみんなですディスカッションしながら、見つけてみよう。きっと誰かに話してみたくなるだろう。

国際文化論：アジア・アフリカ（Intercultural Studies: Asia and Africa）

°三ツ堀 広一郎 准教授 鈴木 真弥 非常勤講師 北川 香子 非常勤講師
崔 盛旭 非常勤講師 藤田 梨那 非常勤講師 勝畑 冬実 非常勤講師
佐久間 寛 非常勤講師 佐々木 紳 非常勤講師 2-0-0 1Q

グローバル化の時代にあって忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的には中国、韓国、インド、カンボジア、トルコ、エジプト、西アフリカの7カ国（7地域）に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、歴史、伝統、社会などを概観する。各地域の専門研究に従事する7人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの7地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

国際文化論：ヨーロッパ・ラテンアメリカ（Intercultural Studies: Europe and Latin America）

°三ツ堀 広一郎 准教授 小笠原 能仁 非常勤講師 河村 英和 非常勤講師
土田 久美子 非常勤講師 内田 兆史 非常勤講師 エウニッセ・スエナガ 非常勤講師
宮崎 淳史 非常勤講師 中島 太郎 非常勤講師 2-0-0 2Q

グローバル化の時代にあって忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的にはドイツ、フランス、イタリア、ロシア、チェコ、メキシコ、ブラジルの7カ国に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、伝統、歴史、社会などを概観する。各地域の専門研究に従事する7人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの7地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

世界文学1（World Literature 1）

°市川 伸二 教授 劉 岸偉 教授 三ツ堀 広一郎 准教授 安德 万貴子 准教授
河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師 2-0-0 3Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、中国の文学作品をオムニバス形式の授業で鑑賞する。

世界文学を読むことによって、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、更に文学を通じた異文化理解の仕方を獲得することができる。

世界文学2（World Literature 2）

°市川 伸二 教授 劉 岸偉 教授 三ツ堀 広一郎 准教授 安德 万貴子 准教授
河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師 2-0-0 4Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、中国の文学作品をオムニバス形式の講義で鑑賞する。

世界文学を読むことによって、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、さらに文学を

通した異文化理解の仕方を獲得することができる。

教養特論：オペラへの招待 (Special Lecture: Introduction to Opera)

山崎 太郎 教授 2-0-0 1Q

オペラは歌とオーケストラ、舞台美術と衣装、言葉と演技といったさまざまな要素が一体となって、愛と死をめぐる人々の情念と社会の複雑な様相を描き出す総合芸術である。視覚と聴覚の相乗効果には何ものにも代えがたい魅力があり、それゆえに16世紀末の誕生以来、貴族社会から市民社会へのヨーロッパの歴史の変遷において、娯楽と教養の対象として発展を続け、現在、世界的な舞台芸術としての地位を確立するにいたっている。本講義では代表的な作品をいくつか紹介。各作品をさまざまな角度から掘り下げ、その魅力に親しむことで、現代の私たちにとってオペラが持つ意味を考え、ひいてはヨーロッパの社会と文化の成り立ちをより深く理解するための一助とする。

オペラといえば欧米で主に富裕層のために上演される豪華な芸術であり、日本に住む学生にはあまり縁のないと一般的に思われているが、今日の日本でもさまざまな上演が行なわれ、時には学生のための特別な価格設定がなされていたりする。またオペラは何よりもテレビドラマや映画と同様、人間たちの織り成す関係や喜怒哀楽の感情を描くドラマであり、演出によってはそれが(オリジナルのト書とは違う)現代の舞台装置や衣装という設定で示されたりもして、きわめて身近なものと感じられることもある。授業を通じて、このようなオペラの多様な在り方を紹介し、ヨーロッパの伝統文化への理解を深めるとともに、現代の私たちが生きる社会におけるオペラの意義を考えてゆきたい。

教養特論：身体教養科学 (Special Lecture: Physical Activity)

林 直亨 教授 須田 和裕 准教授 丸山 剛生 准教授 石川 国広 助教

小谷 泰則 助教 2-0-0 2Q

身体や身体活動は我々の日常生活を支える重要なものである。本講義では、身体に関わる様々な現象・事象を紹介し、それらの意義や、背後にある生理的・工学的・心理的・社会的なメカニズムについて考えてみる。

身体や様々な活動に人知の及ばない素晴らしさがあることを確認し、それらの意義を考え、メカニズムを紐解く一助としたい。

哲学C (Philosophy C)

桑子 敏雄 教授 2-0-0 1Q

行為の哲学を学ぶ。

芸術C (Arts C, Esthetics C)

伊藤 亜紗 准教授 2-0-0 1Q

本講義は、戦後から現代までの日本のアート(音楽、小説、映画、アニメを含む)の流れを、その文化的社会的背景を踏まえてについて概観します。作品はその時代を反映します。当時の人びとがどのようなことを考え、何を感じていたか。なぜその時代にそのような作品が生まれたのか。グループワークや講師による解説を通して理解していきます。

本講義のねらいは、ふたつあります。ひとつは、戦後日本を代表する作品に親しむことです。ふたつめは、日本社会の歩みについて、単なる知識としてではなく実感を持って理解することです。

文化人類学C (Cultural Anthropology C)

上田 紀行 教授 2-0-0 3Q

「苦悩と解放の人類学」-人間は誰もが幸せになりたいと望んで生きている。しかし私たちは多くの苦悩に直面しながら生きる存在でもある。

人間にとっての苦悩とはいかなるものか、文化が違えば苦悩の形も違うものなのか、それとも人類に共通の苦悩の形があるのか。日本社会に特有の苦悩はいかなるものなのか。そうした人間にとっての苦しみを前半では扱う。

後半ではその苦悩からの解放を論じる。私が長年論じてきた、人間にとっての「癒し」とは何か。宗教は人間の解放を導くのか。祭や儀式などのパフォーマンスの開く世界はいかなるものか。人間はなぜアートを必要とするのか。

様々な文化における苦悩の形、そしてそこからの解放の形を知ることは、人生にとって有益な体験となることだろう。また講義形式だけではなく、参加型のワーク、ディスカッション等も頻繁に行われるので、活発な参加が期待されている。

文学C (Literature C)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 4Q

本講義では、学生が短編小説を執筆し、授業内で発表・批評し合う。

初回・第2回の授業で担当教員自身の小説観や執筆法、過去に発表した作品について説明した上で、第3回目以降は学生自らが執筆した短編小説を授業内で発表・批評し合う。議論の中で、「創作の楽しさ・難しさ」を共有すると同時に、「小説に内在する力」や「小説を生成する原理」、更には芸術作品を生み出すために必要な「創造的思考」「オリジナリティー」についても考える。

歴史学C (History C)

中西 恭子 非常勤講師 2-0-0 4Q

この講義では、古代ローマ宗教史上の重要課題を概観する。

前史となる共和政末期から、帝政後期における「キリスト教の公認と国教化」以後に至る時代を言及の対象とする。

歴史学において宗教や当時の世界に生きたひとびとの心性を主題として扱うことはどのように可能か。また、古代地中海世界における宗教的思考と科学的思考の接点はどこにあるか。紀元後4世紀以降に「ローマ帝国のキリスト教化」が起きてかつての「朗らかでおおらかな八百万の神々の文化」が滅んでいった、という歴史叙述上のストーリーテリングはどこまで妥当か。このような問題意識を通して、歴史学における心性史研究・インテレクチュアルヒストリー研究とその方法論の今日的意義を紹介する。

科学と宗教の接点に関する話題としては、大宇宙と小宇宙の呼応の観念にもとづく宇宙論と生活倫理の関係性、都市空間の構成と宗教施設・墓域の立地、暦と時間の感覚、リプロダクティヴ・ヘルスとジェンダー・セクシュアリティに関連する医療と代替医療、ローマ人の地理学的・自然学的思考のなかの「他者性」、4世紀末から5世紀初頭にアレクサンドリアで活躍した女性天文学者ヒュパティアの惨殺と古代末期の宗教事情をめぐるナラティヴを扱う予定である。

ウェスウィオス火山の噴火を代表とする天変地異の事例や、ローマ帝国の人々の生活倫理の背景にある諸宗教、とりわけ在来の諸宗教とキリスト教の相克は後世の作家・芸術家の想像力をさまざまに喚起してきた。この講義では、フィクション・史伝のなかで扱われてきた「ローマ人と天変地異」「古代ローマの宗教現象」像のアダプテーションを必要に応じて紹介し、歴史学における史実の再構成の試みの相違についても考える機会を提供する。

宗教学C (Religion C)

弓山 達也 教授 2-0-0 1Q

本講義では日本人の死生観を理解することを目的とする。そのため世界的に有名な日本映画を取り上げ、小レポートや議論によって、その映画に見られる死生観を見極めていく。扱う映画は滝田洋二郎監督「おくりびと」、加藤久仁生監督

「つみきのいえ」(2008年), 小津安二郎監督「東京物語」(1953年), 北野武監督「HANA-BI」(1998年)である。

法学(憲法) C (Law (Constitutional Law) C)

辻 健太 非常勤講師 上田 宏和 非常勤講師 2-0-0 2Q

この講義では、まず、憲法の背景にある立憲主義の理念とその歴史について解説する。そのうえで憲法における重要な人権や統治の基本的な仕組みにおいて、立憲主義の理念がどのように活かされているのかを説明する。

憲法の基本原理をおおむね理解した上で、身の周りで生じるさまざまな憲法問題を自分自身で考える力を涵養することをねらいとする。

法学(民事法) C (Law (Civil Procedure Law) C)

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

民事裁判の手続法として、民事訴訟法、民事執行法等を学習する。弁理士試験科目などの民事訴訟法に該当する。

本科目の目的は、社会の中で必ず発生する紛争を、裁判によりどのように解決することができるのかを、民事訴訟法を学習することにより理解することにある。民事裁判制度がどのような仕組みで、どのような法理論により組み立てられているのかを理論的に学習することができる。民事紛争解決には裁判だけではなく代替的紛争解決手続の学習、民法で学習した権利義務が裁判ではどのように取り扱われるかを学習することができる。

法学(民事法・知財) C (Law (Intellectual Property Law) C)

安形 雄三 非常勤講師 菅野 智子 非常勤講師 井口 加奈子 非常勤講師

岡本 守弘 非常勤講師 辻河 哲爾 非常勤講師 廣瀬 しのぶ 非常勤講師

小川 憲久 非常勤講師 椛山 敬士 非常勤講師 小倉 秀夫 非常勤講師

2-0-0 3Q

東京工業大学で知的財産法を体系的に学習することができる唯一の科目である。東工大 OB や知的財産実務で活躍する弁護士等の専門家も加わり、基礎的な内容から実践的な内容へのつながりを、民法の財産法から各知的財産権法まで順次学習していく。担当予定(金子宏直, 安形雄三, 太田昌孝, 菅野智子, 井口加奈子, 岡本守弘, 辻河哲爾, 廣瀬しのぶ, 小川憲久, 椛山敬士, 小倉秀夫)。平成27年度までの総合科目「先端科学技術と知的財産権」の後継科目である。複合領域コース「科学技術と知的財産権コース」科目である。

研究者、エンジニアを将来のキャリアに予定している学生の方も多と思われるが、研究や製品開発を行うには多額の資金が必要になる。こうした資金を獲得するために重要な役割を果たすのが知的財産権(特許等)である。発明等により知的財産を作り出すだけでは、資金につなげることができない。特許権などの知的財産権を取得し、それを有効に利用することが必要になる。この知的財産権の取得、利用活用に携わる主な専門職が、弁理士である。東工大の卒業生には多くの弁理士が活躍している。弁理士数(出身校別平成24年統計)によると東京工業大学47名(全837名中)5.8%にも及ぶ。科学技術と知的財産権の関係について理解を深め、科学者、技術者として必要な知識を深めるとともに、弁理士などを目指す学生にも有益な学習の機会を提供することが狙いである。

政治学 C (Political Science C)

中島 岳志 教授 2-0-0 1Q

近代日本の政治・外交とナショナリズムの関係について講義する。特に精神史の観点を導入し、日本が積極的に全体主義へと傾斜して行った過程を論じる。明治国家は「一君万民」をテーゼとし、王政復古による封建制打を目指したが、誕

生じた政府は一部の藩出身者が行政を独占する藩閥政治だった。この体制に対する「第二の維新」を目指す武装闘争・言論闘争が、超国家主義の源流を生み出す。さらに明治後期に入ると、富国強兵・殖産興業といった国家目標に自己同一化できない悩めるエリート青年（煩悶青年）が登場し、精神上、新しい時代を迎える。そして、彼らの中から昭和維新テロ・クーデターを主導する超国家主義者が誕生する。本講義では文学作品や社会現象も分析の対象とすることで、「八紘一宇」というヴィジョンに人々が魅かれて行ったプロセスを論じる。このプロセスを辿ることは、現代日本を相対化することに通じる。講義では、現代社会への視座を意識し、歴史の中から問題の本質を抽出する方法を論じる。

本講義のねらいは3つある。一つ目は、近代日本政治が歩んだ道筋を的確に把握すること。二つ目は日本が全体主義へと傾斜して行ったプロセスを説明できるようになること。三つ目は、超国家主義者となっていた人物の内在的批評を通じて、現代社会と共通する不安の問題を考察すること。この能力を身につけることによって、現代日本の政治を論じる視座を獲得する。

国際関係論C (International Relations C)

鈴木 健太 非常勤講師 2-0-0 3Q

国際関係を扱う講義である。「国際関係」とはどのような概念や枠組みで、それをめぐっていかなる論理／議論があるのか。この点を概論と各論、また具体的な事例を通して見ていく。

最初に、国際関係に関する学問体系・理論を踏まえながら、基礎的な概念、事項について概観する（概論①～③）。

次に、国際関係と結びつく様々な概念・事象を個別に取り上げ、それらキーワードと国際関係の関係を確認しながら、より具体的に国際関係の多面的、学際的な諸相について考えていく（「〇〇と国際関係」①～⑧、映画でみる国際関係・前後編）。その際、ヨーロッパや東欧、さらに旧ユーゴスラヴィア地域の事例にとくに焦点を当てる。担当教員は東欧・バルカン地域研究、ユーゴスラヴィア現代史を専門としており、日本ではあまり馴染みがない、これらの地域やその現代史の観点を交えながら国際関係の多様な側面に迫っていきたい。

一連の講義を通して、概論から具体的な題材までに触れながら、国際関係を把握する基本的な視点を獲得するとともに、国際関係をめぐる議論について理解を深め、さらには自ら批判的に考察することが本講義のねらいである。

心理学C (Psychology C)

永岑 光恵 准教授 2-0-0 3Q

本講義では、ストレス科学を主に心理生理学的側面から取り上げる。避けたい、減らしたいと考える「ストレス」について、ストレス科学の歴史から振り返り、最新のストレス研究成果を紹介する。また、体験的にいくつかのストレス軽減方法も講義内で行う。

講義を通して、ストレスやストレス管理に関する新たな考え方を獲得し、日常生活に活かせるようにすることを目的とする。

教育学C (Pedagogy C)

吉田 直子 非常勤講師 2-0-0 1Q

「識字」とは、文字を読み書きする能力のことである。とりわけ教育が行き届いていない開発途上国では、文字の読み書きができないために貧困の連鎖から抜け出せずにいる人々が少なくない。そのため世界では、UNESCOを中心とする「万人のための教育 (EFA: Education for All)」の取り組みを通じて、途上国に対するさまざまな教育支援が行われている。一方、先進国が途上国に対して行う支援の中には、先進国の価値観に基づく「開発」の押し付けに過ぎないとの批判の声があることにも注視する必要があるだろう。またこの問題とは別に、UNESCOは、グローバリゼーションの進行に伴い、世界で方言や少数言語の消滅が進んでいることを警告している。そこで本講義では、識字教育を糸口に、ことば＝文化に

関する複数のトピックを、映像資料やデータを用いつつ紹介する。またそれらのトピックに対する考察を踏まえ、望ましい支援のあり方についても検討を試みる。

本講義のねらいは、次の3点である。まずひとつめは、識字教育に対する理解を深めることである。ふたつめは「ことば」の問題を、文化的多様性と政治性の観点から捉え直すことである。最後は他者を支援することについて考察を深めることである。

社会学C (Sociology C)

西田 亮介 准教授 2-0-0 1Q

本科目は、日本社会の民主主義とその啓蒙プロセス、それらの課題と展望を検討する。とくに、投票年齢の引き下げと市民性教育を取り扱う。

さらに日本社会が民主主義や政治に向き合った/向き合わざるをえなかった時代の知見を、現代の、そして今後の日本の民主主義の維持、発展にどのように活用するかという問いを検討する。

現代社会論C (Contemporary Society C)

榎本 英剛 非常勤講師 2-0-0 3Q

この講義では、現代の産業成長型社会の特徴およびそれがもたらしている危機、そしてそれに代わる生命持続型社会の提示とどのようにその社会変容を促すのかについて扱う。

学生が将来どのような分野に進むにしても、自分が属する社会が向っている方向性の認識およびその中で自分がどのような役割を担うかの自覚がなければ、その活躍の場を見出すことはできない。そういう意味で、1) 今どのような社会変容が求められているのか、2) なぜそれが求められているのか、3) それが起こるためには何が必要か、4) 自分たちがそれを起こすためにできることは何か、5) それが起こったときにはどのような社会が出現するのかを概念だけでなく、グループワークや映像を通して体感することが大事であり、それこそが本講義のねらいとするところである。

経済学C (Economics C)

内藤 克幸 非常勤講師 2-0-0 3Q

本講義では基本的な動学的マクロ経済モデル、特に世代重複モデルを解説する。

ほとんどの国で世代間所得移転政策が実施されている。例えば、賦課方式の年金制度では若年世代から老年世代への所得再分配が行われることになる。これらの政策は世代間での利害対立を引き起こし、また経済活動に対して重大な影響を及ぼしている。本講義では、経済政策の厳密な分析手法の修得を目標として授業を進める。

統計学C (Statistics C)

未定 2-0-0 4Q

計量政治学の基礎を学ぶ。統計学的思考の特質、記述統計・仮説検定・相関・様々な回帰分析（線型、ロジット、順序ロジット、パネルデータ分析、イベントヒストリー分析等）の理論を学ぶと同時に、統計ソフト「R」を用いた分析手法を修得する。そのねらいは、政治現象に関わるマクロデータ・ミクロデータから重要な情報を引出し、因果的推論に基づく研究手法を身に付けることにある。

科学史C (History of Science C)

佐藤 賢一 非常勤講師 矢島 道子 非常勤講師 2-0-0 1Q

本講義は、毎火曜日に行われる第一部（数学史）と毎金曜日に行われる第二部（生物学史・地質学史）の2つの部分に分かれている。

第一の部分の概要は以下の通りである。

近代以前の東アジアの数学史を概説する。前半は古代・中世の中国数学を講義し、後半は近世日本の数学史を講義する。近代以前の東アジアに存在した数学を概観することで、現代数学に繋がる近代西洋数学との対比を考察するための素材を提供する。

第二の部分の概要は以下の通りである。

古代から現代に至る科学の歴史をたどってゆくと、16、17世紀からだんだんと近代化され、近代化されていくのを理解する。さらに、それぞれの時代で科学が社会の中でどんな位置にあったかも理解する。また、女性が科学の中でどんな位置にあったかということも考えていきたい。こうした試みをつうじて、科学の時間軸（歴史性）と空間軸（社会性）を形成し、科学の「いま」への理解を深めていく。

技術史C（History of Technology C）

中島 秀人 教授 2-0-0 3Q

この授業では、19世紀後半以降のように科学と技術が融合して科学技術となったかを議論し、科学技術とは何かを明らかにする。また、20世紀の産業社会がどのように歴史的に形成されたかを知ることで、21世紀の科学技術のあるべき姿を考える基礎を得る。

科学技術社会論・科学技術政策C（Science and Technology for Society C）

調 麻佐志 准教授 2-0-0 2Q

科学技術社会論の問題にクリティカルシンキングを適用して考える訓練を行う。そのために多面的な理解が求められる複雑なトピックを取り上げ、一回はそのトピックに関する概略を講義し、もう一回は学生間のディスカッションに当てて授業を進める。

本講義の狙いは、

- (1) 科学に対して批判的な見方を論理的に表現すること
 - (2) クリティカルシンキングの技法を使うことを
- を経験し、学ぶことである。

科学技術倫理C（Ethics in Engineering C）

札幌 順 教授 2-0-0 1Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的な科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること（well-being）」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを具体的な事例をとおして検討する。責任ある研究・開発活動も、本科目の重要な要素である。

上記の目的に加え、本科目では、科学技術倫理に関連する事例を自ら調査・分析し、その結果を報告する能力の育成も目指す。

科学哲学C（Philosophy of Science C）

小山田 圭一 非常勤講師 2-0-0 1Q

意思決定論 C (Decision Making C)

猪原 健弘 教授 2-0-0 2Q

集団意思決定状況を数理的に扱うための会議の理論の基礎概念を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。具体的には、「シンプル ゲーム」、「会議」、「提携の強さ」、「会議のコア」、「整合的な提携」、「意思決定主体の許容範囲」、「許容ゲーム」、「提携の望ましさ」、「安定な提携と安定な代替案」、「仮想許容範囲」、「後悔のない代替案」、「会議のコアの特徴づけ」を検討する。

会議の理論の基礎概念を理解し、それを他者に伝える能力を涵養することが本講義のねらいである。

社会モデリング C (Social Modeling C)

大堀 耕太郎 非常勤講師 穴井 宏和 非常勤講師 2-0-0 1Q

本講義では、社会システムにおける人々の複雑な影響関係をモデル化し、望ましい施策や制度を設計するための方法論について解説する。具体的には、ゲーム理論、メカニズムデザイン、ネットワーク分析、社会シミュレーションなどの人間の心理と行動を扱う理論と方法について解説する。

社会システムにおける人々の意思決定状況を数理的にモデル化し、社会システムの施策や制度を設計し、それを評価する、という社会システムデザインに関する一連のプロセスについて理解することが本講義のねらいである。

言語学 C (Linguistics C)

赤間 啓之 准教授 山元 啓史 准教授 1-1-0 1Q

言語学 C では脳神経言語学を中心に、関連する認知言語学、統計言語学(自然言語処理)まで概観する。脳の構造・機能を通じて言語を捉えようとする科学の歴史から説き起こし、先人達がどのような測定方法で言語機能の神経基盤を解明してきたか、特に機能的磁気共鳴画像法(fMRI)に重点を置きつつ紹介する。現代言語学の重要なテーマである、言語習得、多言語併用、言語障害(失語症)、意味処理、記憶・知覚・運動・情動などについては、基本から最近の研究動向まで紹介する。また脳神経言語学の研究に必須な計算プログラミングについて、導入的な解説を行う。更には担当者が管理運営を行っている生命理工学院・機能的磁気共鳴画像法(fMRI)施設を利用し、脳神経言語学の実験とデータ解析に必要な実験計画法、統計解析など様々な手法について導入的な授業を行う。

学生は言語と脳についての科学に触れることで、人間に関する教養と研究の基本的スキルを身につけることができ、この研究分野の楽しさ、難しさに気づくことができる。人間理解が深まることで、高度な情報社会、科学技術社会で生きてゆく際に自分にとっての羅針盤を作る上で一助となりうる。

教養特論：日本思想史 (Special Lecture: Intellectual History in Japan)

畑中 健二 助教 2-0-0 1Q

過去から現在の、日本に展開した思想について論ずる(「そもそも『日本』とは、『思想(史)』とは何か?」も議論の対象に含まれる)。講義全体の視点となるテーマを一つ定め、それに沿って歴史上のいくつかのトピックに焦点をあてる。2016年度のテーマは「悪」。テーマ設定の意図やその射程は初回講義で説明する。

「日本思想史」という領域には、多くの文化研究や地域研究と同様に、「これを学ばばこと足りる」というような特定のディシプリンは存在せず、代わりに個々の主体的取り組みとその対話があるといってもよい。そこでは、したがって、当たり前のこととしての領域横断的な学修と、互いの研究を理解・批判するコミュニケーション能力が求められることになる。

こうした特性をリベラルアーツの一環としての本講義にも活かし、日本の思想・歴史に関する理解の深化を通して、既

存の枠組みに囚われすぎないように、広く応用可能な思考力を身につけることをねらいとする。

教養特論：メディア心理学 (Special Lecture: Media Psychology)

岩男 征樹 助教 2-0-0 3Q

教養特論：テキスト解釈論 (Special Lecture: Text Hermeneutics)

村井 源 助教 2-0-0 1Q

文書に書かれたことばの意味は一通りとは限らない。文書の書かれた時代背景・文化・言語・修辞法などの文書自体の特徴に合わせて、他の文書との関連性、文書を読む側の視点の問題なども踏まえることによって深遠な意味の世界が開けてくる。講義では、文書の意味を理解するためのさまざまな手法を、実例を挙げつつ紹介していく。

教養特論：スポーツ科学 (Special Lecture: Sports Science)

林 直亨 教授 丸山 剛生 准教授 2-0-0 1Q

スポーツの競技力向上には、様々な科学・技術が貢献している。ここでは、運動生理学と、バイオメカニクスとに関連する事象を取り上げ、それらの科学の基礎的な概念との関連を扱う。すなわち、身体が出力するエネルギー量を抑制するために、効率よく運動する手法を発見するバイオメカニクスと、身体が出力できるエネルギー量を増加させるために、発揮できる力・持久力を向上させる運動生理学とが、どのように競技力向上と関連したのかについて考えていく。

教養特論：人間関係論 (Special Lecture: Human Relations)

齋藤 憲司 教授 安宅 勝弘 教授 2-0-0 3Q

本講義では、現代社会における人間関係の諸相や社会と人間において生じる様々な課題に、臨床心理学および精神医学的観点からアプローチする。人間科学、精神科学に独自の方法論とその思想、理念を論じるとともに、対象となる人間の多様性を紹介する。各種資料を用いながら、人間のあり様および関係性について検討し、出席者とともに考察を進めていくことで、科学的・客観的な思考に加えて、個別性や主観性をも尊重しうる態度を構築していくことをめざす。具体的には、青年期にある自身を振り返り、どのような人間関係の中で育ち、支えられ、時に葛藤してきたかを臨床心理学の見地から検討・考察するとともに、現代社会の大きな関心事である「こころの健康」について、精神医学の立場から多角的に考えていく。

本講義のねらいは、ひとつには、よりよい理工人としてのあり方と対人ネットワークづくりについて実習を通じて修得していくことであり、もうひとつには、人間関係、すなわち他者や社会との関わりという観点についての洞察を深めていくことである。

教養特論：ジェンダー (Special Lecture: Gender)

野田 潤 非常勤講師 2-0-0 3Q

性別とは、最も「自然」「常識」と思われがちなテーマのひとつである。本講義では、性別に関する私たちの「当たり前」が、いかに当たり前ではなく「不思議なこと」なのかについて、身近なトピックを用いながら考えてゆく。講義ではジェンダーにまつわる基本的な概念や理論を習得し、現代日本社会の性別に関する諸問題を学んでゆく。その際には量的データ・質的データの双方を用いつつ、歴史社会学や比較社会学の視点も取り入れてゆく。最終的には性別に関するさまざまな社会問題を論じつつ、そうした諸問題に対応するための知識や思考、物の見方を養っていく。

受講者には本講義を通じて、(1)性別そのものがいかに社会的に規定されているか、(2)性別に関する身の回りのさまざま

まな問題がいかに社会的な問題とつながっているのかを理解してもらいたい。同時にこれらのプロセスを通じて、(3)「社会」に対する感受性を深めてもらうことも期待する。

教養特論：音楽 (Special Lecture: Music)

大谷 能生 非常勤講師 2-0-0 1Q

本講義では、20世紀にかたちをとった音楽—ジャズ、スタンダード、ブルース、R&B、ロック、ファンク、ディスコ、タンゴ、サンバ、歌謡曲、映画音楽、現代クラシック音楽など—について、それが成立するに至った歴史過程とその音楽構造を解説する。レコードやラジオといったマスメディアに經由されることによって、20世紀の音楽は、それを作り楽しんだ人たち以外の外部を巻き込んで流通・発展する「商品」となった。現在、その多くがPC・インターネット上のデータとして並列的に扱われている「音楽」の、その誕生する瞬間を確認する作業を通して、作品を鑑賞するための知識と感覚を学び、文化における多様性について受講生が理解するための基本姿勢を提供することを講義の目標とする。

教養特論：環境 (Special Lecture: Environment)

中野 民夫 教授 2-0-0 4Q

地球環境問題をはじめ現代社会には深刻な課題が山積みだが、これらの諸問題に向き合い、各人なりに少しでも良い方向へと動いていく力は、どのように得られるのだろうか。「誰かにやってほしい」という受動的な希望ではなく、自ら創りたい未来を描き参画していく積極的な希望、「アクティブ・ホープ」を育みたい。アメリカから世界に広がったジョアンナ・メイシーらの「つながりを取り戻すワーク」を学び、転換期を生きる拠り所、「深いやすらぎ・大きな勇氣」を探る。

ねらいは、環境など世界の諸課題に対して、きちんと現実を見つめ、どんな時にも希望を失わずに前向きに動け、人生と社会を豊かにする力を身につけること。

教養特論：都市 (Special Lecture: Cities)

白川 慧一 非常勤講師 2-0-0 2Q

都市は、イノベーションと経済成長、文化交流の場となるという意味において、現代の我々の生活を支える基礎であると同時に、様々な社会問題が発生する舞台でもある。

利害が対立する個別主体の活動を調整し、都市という存在を秩序立てているのは、活動の背景に存在する社会、制度である。都市の諸問題を理解し、その解決策を考える上では、個々人の意思決定はもちろんのこと、その前提となる社会、制度にも着目する必要がある。

加えて、都市に関わる諸問題は、その内容、性質、規模などが一様ではなく、また、時には都市の外部との関係性も重要な要素となり得る。都市に関わる諸問題の構造化には、特定の学問分野にのみ縛られず、それぞれの問題に見合った知識を援用できるだけの幅広い視座が必要である。

本講義では、主に現代日本を対象に、都市にかかる具体的な諸問題を取り上げ、自ら学んだ科学技術、専門知識を問題解決に役立てるためにはどのような視点が必要か、問題を構造化し、多彩な知識を応用することで解決策を見出す力を養うことを目指す。

教養特論：医療 (Special Lecture: Medical Care)

尾形 裕也 非常勤講師 西村 幸満 非常勤講師 大津 唯 非常勤講師 2-0-0 4Q

(概要) 少子高齢化が進む中で、健康と長寿に対する関心は日増しに高まっている。人々の健康を維持するためには、医療の役割は大きい。家族の働き手や子どもの健康を維持するためにも、引退した高齢者の健康を維持するためにも、人々

の特徴とニーズに合わせた医療の提供が必要であり、そのための医療制度の整備と医療サービス提供の仕組みづくり及びこれらの制度運営などが重要である。この講義では、医療に関連する次のような論点と問題について、それぞれの専門家がリー形式で、講義を行う。月曜日には、人々の暮らしと収入・所得の状況及びこれに関連する健康の格差と医療における対応策（医療アクセスの問題など）について講義を行い、木曜日には、我が国の医療制度や医療提供の仕組みとその運営などについて講義を行い、必要に応じて他の先進諸国の医療制度との比較を行う。

（ねらい） 医療に対するニーズは、人々の年齢や暮らし向き、働き方と収入、現役か引退した高齢者かで異なり、多様な側面をもつ。そのような多様な医療ニーズに応えるために、政府や地方自治体は、医療制度を整備し制度運営を行っている。また、働く人々の健康を維持するために、企業もまた健康保健組合を通じて医療の提供に拘わっている。このような医療の仕組みと医療の役割を知ることにより、社会の仕組みや企業活動との関係を視野に入れながら、本人の健康維持・増進のみならず、企業で働く人々と家族の健康維持・増進について理解を深めることが可能になる。

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション） 1, 3, 5（Seminar on Humanities 1, 3, 5）

上田 紀行 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション） 2, 4, 6（Seminar on Humanities 2, 4, 6）

上田 紀行 教授 0-2-0 3Q, 4Q

各自が自分自身の問題意識に基づくテーマで2～30分くらいの発表を行い、それについてゼミ生全員でディスカッションを行います。テーマは、社会、文化、人間に関することならば何でも。これまでも、格差問題、国際援助、政治のあり方といった社会的なテーマから、恋愛、映画、サークル内の人間関係といった身近なテーマまで、様々なテーマが深く語り合われてきました。

学期中に数コマを続けての集中ゼミを数回、そして前期は夏休み中、後期は春休み中に一泊二日のゼミ合宿を行います。自分の発表を準備し、発表することで、また他の人の発表を聞くことで、プレゼンテーション能力が格段に向上します。また多様なテーマの発表に触れることで、世界が広がり、様々な分野へのアクセスが可能になります。自分とは異なる思考法、感性を持った人たちと深く語り合うことで、自己探求が進み、また深い議論ができる仲間を作ることができます。

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 1, 3, 5（Seminar on Humanities 1, 3, 5）

中野 民夫 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 2, 4, 6（Seminar on Humanities 2, 4, 6）

中野 民夫 教授 0-2-0 3Q, 4Q

この世に生まれた一人の人間としての幅広い成長を目指し、「参加と協働と至福の場づくり」をテーマに、学び合いのコミュニティを育みたい。

具体的に体験を通して学びたいことは二つ。ひとつは、ワークショップや創造的な対話をファシリテート（促進）する参加型の場づくりの技法。それぞれの思いや知恵を引き出し、相互作用の中で大きな学びや創造へと展開するファシリテーターのスキルとところを、身につけていく。もうひとつは、ホリスティックな人間力。身体を調べ、呼吸を調べ、心を調べ、今ここに集中できるマインドフルネスを養う。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 1, 3, 5（Seminar on Humanities 1, 3, 5）

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

この講義では、芸術祭等へのフィールドワークを行います。大学の教室での学びを離れ、自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。本年度は、夏休みに2泊3日で、瀬戸内国際芸術祭に行きます。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 2, 4, 6 (Seminar on Humanities 2, 4, 6)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

この講義では、冬休み中の4日間の集中講義で行い、毎日異なる課題（例：キャンパス内に異空間を作れ）に対して作品を制作を行い、その後でじっくり講評を行います。自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 1, 3, 5 (Seminar on Humanities 1, 3, 5)

弓山 達也 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 2, 4, 6 (Seminar on Humanities 2, 4, 6)

弓山 達也 教授 0-2-0 3Q, 4Q

このゼミでは宗教学の基本的な考え方を学びつつ、特に新宗教、カルト、宗教と暴力、スピリチュアリティの問題を取り上げて、理解を深めていくことを目的とする。そのためゼミでは現代宗教に関するテキストを読み、議論を行い、現地研究を実施する。

社会科学系ゼミ（法学ゼミ） 1, 3, 5 (Seminar on Social Sciences 1, 3, 5)

金子 宏直 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ） 2, 4, 6 (Seminar on Social Sciences 2, 4, 6)

金子 宏直 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

文系ゼミ（法学等）の後継。法律学の教科書等、論文、判例・事例等をもとに議論を通じて学習を深める。

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学） 1, 3, 5 (Seminar on Social Sciences 1, 3, 5)

西田 亮介 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学） 2, 4, 6 (Seminar on Social Sciences 2, 4, 6)

西田 亮介 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

政策研究、メディア研究、ガバナンス研究、社会課題解決の理論と実践等について、各自の問題意識に基づき、広く学際的なアプローチで探求する。

また関連して必要な、社会学、政治学、行政学、政策研究、メディア論の文献購読を通じて、問題意識、社会科学的思考を深化させる。必要に応じて、研究、実践のプロジェクト等に取り組む。

融合系ゼミ（意思決定論） 1, 3, 5 (Seminar on Transdisciplinary Studies 1, 3, 5)

猪原 健弘 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（意思決定論） 2, 4, 6 (Seminar on Transdisciplinary Studies 2, 4, 6)

猪原 健弘 教授 0-2-0 3Q, 4Q

受講生は、担当教員と協議して決定した意思決定論に関する課題に取り組む。文献等の調査を通じて課題に関連する事項の理解を深め、討論などを通じて問題を明確化し、解決を図る。課題に取り組むこれらの過程において、それまで学修してきた様々な科目によって身に付けた専門知識及び周辺の基礎知識等を活用して問題を解決する手法を身に付ける。また、データの取得、取得したデータの解析とその考察といった手法に習熟するとともに、複眼的に事物を観る力を養成する。さらに、得られた成果をまとめて報告書を作成し、発表・討論を行う。

融合系ゼミは、学生個々が特定の課題に取り組む研究室教育の中核をなすものであり、体系的カリキュラムに基づくコ

ネットワークと相互補完の関係にある。課題に取り組むことにより、意思決定論に関する専門力の向上とともに、新たな課題・問題を発見・設定する力、未解決の問題を解決に導く力など、社会で必要とされる総合的な開発力を身につけることが期待される。

融合系ゼミ（歴史における科学・技術） 1, 3, 5 (Seminar on Transdisciplinary Studies 1, 3, 5)

梶 雅範 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（歴史における科学・技術） 2, 4, 6 (Seminar on Transdisciplinary Studies 2, 4, 6)

梶 雅範 教授 0-2-0 3Q, 4Q

科学史に関心のある学生が、それぞれに科学史に関する独自のテーマを設定して、関係文献を読み、テーマに関するレポートをまとめる。そうした作業を通じて、科学史研究の基礎力を向上させる。

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育） 1, 3, 5

(Seminar on Transdisciplinary Studies 1, 3, 5)

札幌 順 教授 0-2-0 1Q, 2Q

本科目では、倫理の原点に立ち返り、人が「よく生きること (well-being)」ことについて、文系・理系の枠を越えて、超際的に検討する。また、最近、国連などでも注目されている「徳倫理学 (virtue ethics)」の組織運営への活用方法及び、「志向倫理」を重視する倫理教育・研修のあり方を具体的・実証的に考察する。同時に、「よく生きること (幸せ)」に関する最新の科学的知見を、所謂、ポジティブ心理学や「幸福の経済学」、脳神経科学などの学術領域から学び、自らの「well-being」

を向上させる方法、並びに人と組織がより「よく生きること」を促す倫理プログラムのあり方について調査・研究する。

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育） 2, 4, 6

(Seminar on Transdisciplinary Studies 2, 4, 6)

札幌 順 教授 0-2-0 3Q, 4Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを具体的な事例をとおして検討する。